事務局記入スペース　←ここは事務局にて編集時に入力しますので，このままで。

ICT を活用した「地域や日本文化」の紹介

ー児童の自己肯定感，自己効力感の高まりを目ざしてー

JASTEC 小・中学校英語教材・指導法研究会・A グループ

根本孝女（高石市立取石小学校），久門淳子（吹田市立千里第二小学校），

松延亜紀（大阪教育大学），竹田里香（立命館大学）

１．はじめに

本発表は，令和 4 年 1 月に再発足した「JASTEC 小・中学校英語教材・指導法研究会」の 5 つの研究グループの内，動機づけ，自己肯定感を研究するグループから，2 つの実践（実践①，②）を報告する。実践①は，2022 年 6 月に大阪府下 A，B 小学校の 6 年生（各 2 クラス，計 126 名）と宮崎県門川町の小学校 6 年生（6 クラス，計 183 名）が互いの府県のよいところを紹介する活動，実践②は，2022 年 5 月から 6 月にかけて大阪府下 C 小学校の 6 年生（4 クラス，164 名）と台湾高雄市にある龍華小学校 5 年生と交流したものである。なお，本研究における動機づけや自己肯定感を高める理論的フレームワークとして，Deci ＆ Ryan (1985) の自己決定理論で挙げられている 3 つの欲求：「自律性の欲求」（自ら何かを決定し行動したい），「有能性の欲求」（何かを遂行できる自信や能力を持ちたい），「関係性の欲求」（他者やコミュニティと関わり連帯感を持ちたい），を援用した。

２．実践

2-1. 実践①　根本実践「宮崎の小学生に大阪の「ええとこ」を紹介しよう」

2-1-1　実践の背景

本実践では，6 年生の児童と宮崎県門川町の小学校 6 年生が互いの府県のよいところを紹介する活動について報告する。本校の多くの児童は外国語授業に対する抵抗感はあまりなく，チャンツやゲーム活動，言語活動に楽しく取り組んでいる。その反面，「分からない」と感じたらすぐに諦めてしまったり，外国語を用いた活動への興味が持続しなかったりする児童も見られる。本校においても，高学年になるにつれ，外国への興味・関心や外国語学習への動機づけが低くなる傾向がある（西田, 2022）。そこで本実践では，動機づけに有効な指導法とされているプロジェクト型学習（PBL）を取り入れ（東野・高島, 2007），指導過程で自己決定理論に基づき，自律性，有能性，関係性を高める工夫を行うとともに，ICT 機器を効果的に活用することで，いかに児童が動機づけられ，主体的に活動に参加できるかを検証する。

2-1-2　実践内容

本実践では，目標を「宮崎県門川町の小学生に大阪の魅力を知ってもらうため，大阪の『ええとこ』を紹介しよう」と設定した。内発的動機づけを高める工夫としては，自分たちで大阪を紹介するテーマやトピックを自由に選んだり，発表スタイルを選ぶことで「自律性」を，友だちと何度も伝え合い，少しずつ内容を改良して自信を持って発表できるようにすることで「有能性」を，グループ紹介の動画を一緒に作ったりすることで「関係性」を高めるよう試みた。また通信機器を活用した学習について肯定的に取り組む小学生が多いとの調査結果があること（学術総合教育研究所, 2018）や，日常的に情報機器で動画の閲覧を楽しんでいる世代であることから，大阪紹介の手段として，ウェブ上の動画編集ソフトを用いて，各自または一緒に発表するメンバーで大阪紹介動画の撮影・編集を行った。

2-1-3　評価

評価は、事前に児童と共有しているルーブリックをもとに、各自または一緒に発表するメンバーで作成した動画で行った。これは宮崎に送る大阪紹介をクラス毎に編集するため提出したもので、テスト用に別撮りしたものではない。マイクを使用し録画しているため、声の小さな児童でも発表内容をクリアに聞き取ることができ、正確な評価を行うことができた。

2-1-4　結果と考察

「宮崎の 6 年生に大阪の魅力を伝える」という明確な目標のもと，児童は「自分だけが知っている大阪のよいところを伝えたい」「宮崎の人に大阪に来たいと思ってほしい」と意気込み，休み時間を返上してまでも何度も撮り直したり，自発的にもう一本別の動画を制作したりするなど，動画作成を楽しみながら，最後まで意欲的に取り組むことができた。児童が紹介した物や場所の数は，たとえば、A 校の 40 名学級で 29 件におよぶなど，「大阪と言えば○○」といったステレオタイプではなく，児童が本当に紹介したいもの，相手が喜んでくれるものを各々が考え選んだことも伺えた。

(1) 振り返りの結果から

振り返りの記述では，「もっと詳しく言いたかった」「発音がおかしいと思うので直したい」といった自己の課題への気づきや，「宮崎の人達に伝わったと思った」「思ったよりスラスラ言えた！」など，「自分はできる」という自信を持てたという記述に加え，「他の都道府県の人とも交流したい」「外国人にも大阪紹介をしてみたい」といった他者とのコミュニケーションへの関心や，「ミートとかで紙芝居や劇をしたい」「外国の紹介などもやってみたい」と英語を使って新しいチャレンジをしてみたいとの記述も見られ，外国語学習への意欲の高まりが見られた。

(2)アンケート結果から

活動後のアンケートでは，「相手に伝わるように大阪の『ええとこ』の紹介を考えて伝えることができるか」という問いに対し，肯定的意見は 93.2%であったことから，多くの児童はこの活動を通して有能性を感じていることが分かった。また，「大阪紹介 movie づくりに積極的に取り組めたと思うか」という問いに対しては，肯定的意見が 91.9%であったことから，多くの児童がこの活動に積極的に取り組んだと感じていることが分かった。

2-1-5　課題と展望

本実践の結果から，指導者がプロジェクト型学習（PBL）を取り入れ，指導過程で自律性，有能性，関係性を高める工夫を行うとともに，ICT 機器を効果的に活用することで，多くの児童が動機づけられ，児童が主体的に活動に参加することができたと思われる。一方で，紹介内容が多岐にわたったこと，児童が何度も撮り直しをしたことから，指導者が内容を把握しきれず，挿入した写真が間違っている，値段が違う等，伝えた情報が正確でないものもあった。専科教員が直面する課題として，担当児童数が多いため，今回のように内容が多岐にわたった場合，どのようにチェック，指導していくかが今後の課題として挙げられる。また、タブレット使用にあたっては，Chromebook は iPad や Windows の PC に比べ使える機能が限られていること，アプリのダウンロードを禁止している自治体が多いため，制約が多いというマイナス面がある。しかしながら，今回のように web 上で稼働するアプリ等を上手く使うことで，児童の興味・関心に合った活動が可能となる。今後も授業で安全に使用できるアプリの研究も行っていきたい。

2-2. 実践②　久門実践「海外の小学校と交流しよう」

2-2-1 実践の背景

本実践では，海外の小学校との交流，評価方法，児童の発表活動等における ICT 機器の効果的な活用方法について報告する。研究を進める背景としては，大阪府下 C 校の児童がコロナ禍で海外旅行に行かなくなったり，海外からの観光客が減ったりするなど，児童が外国文化に直接触れる機会が少なくなったことが要因のひとつとして挙げられる。また，本校実施の意識調査からは外国語学習に対する児童の意欲が低下したことが分かった。この状況を打開し，子どもの興味・関心を高めるためには，海外の同年代の人たちと直接やり取りすることで外国語を使う必要性を感じ，外国文化を学ぶことの楽しさと意義を実感できる経験をすることが最善策と考えた。そこで，2022 年 5 月から 6 月にかけて台湾高雄市にある龍華小学校と交流することにした。

海外の小学校と交流したくても，パートナースクールを見つけることは容易ではない。そこで，今回は EMPATICO という海外のサイトを活用し，台湾の小学校の先生とつながることができた。EMPATICO とはスペイン語で「やさしさ」を意味し，子どもの優しさと共感性を育み，異文化を理解することで紛争等をなくしていこうという理念に基づいた世界の教育者のための交流プラットフォームである。パートナースクールが決まってからは，台湾の先生と何度もビデオツールを使ってやり取りを行い，まずは指導者同士が交流を深めた。そして具体的な交流目的・方法・日程について何度も打ち合わせを行った。指導者同士が事前にこまめなやり取りをすること，信頼関係を築くことが交流を成功させるためには不可欠である。

2-2-2 実践内容

当初，同時双方向型交流も計画していたが，6 月に入り台湾がコロナによる休校措置に入ったため中止（２，３学期に延期）となり，交流は写真，動画，質問のやり取りにより実施した。交流内容は以下の通りである。

表 1　交流内容

	日本	台湾
交流１　写真交流	学校・大阪・日本の写真	学校・台湾の写真
交流２　質問交流	台湾への質問	日本からの質問の返答
交流３　動画交流	学校・給食の紹介	放課後することの紹介

写真や動画などの交流はクラウドを活用し，期間限定で共有をした。写真や動画づくりには，グループ活動を取り入れ，子どもが仲間との関係性を深めながら自ら考え決定していく過程を大切にした。また，台湾の小学生に分かりやすく伝えるためには，どのように話せばいいか，どのように撮影すればいいかなど，文化と言語の異なる相手を意識しながら取り組んだ。さらには，交流が単なる写真や動画のやり取りだけではなく，お互いの関係を深めることができるように，可能な限りレスポンス（写真や動画をみての感想）を送り合うことにした。

2-2-3 評価

台湾に送った動画と同じスピーチを個人録画し，パフォーマンステストとして評価した。ICT 機器を評価にも活用することで，学習の個別最適化を図ることができる。また，児童は通常クラス発表とちがい，視線への恐怖がないため，のびのびとした表情で発表をしたり，納得いくまで何度も自己修正をしながら練習したり，個人の良さややる気を最大限に引き出すことができる。さらに，指導者にとっては、画面全体に顔が写し出されるため評価もしやすく，一人一人に具体的で肯定的なフィードバックを返すことができる。評価では，児童の自信や自己肯定感につながるような声掛けが指導者との関係性をより良いものにし，子どもの動機づけにもつながる。

2-2-4　結果と考察

（1）振り返りの結果から

台湾との交流授業後の子どもの振り返りでは，「実際に台湾に行ってみたい」「違う国の人とも交流してみたい」など子どもの異文化への興味・関心が高まった記述が見られた。また「台湾の子は英語が上手。自分もがんばらねば」「英語は楽しいと思った」など外国語学習への意欲が高まった記述も見られた。「この交流で台湾と日本がつながるような気がした」という台湾との「つながり」と「仲間と協力して取り組むのが楽しかった」という同じクラスの仲間との「つながり」について言及した記述があり，取り組みを通して他者との関係性を深めることができたと言える。

(2) アンケート結果から

交流後に行ったアンケートで，「あなたは外国語を使って外国の人と話してみたいですか」という問いに対して，以下のような結果が得られた。

表 2　「あなたは外国語を使って外国の人と話してみたいですか」の回答結果

	とても話してみたい	話してみたい	あまり話してみたくない	話してみたくない
5 年次 1 学期	30.0	45.3	14.7	10.0　(%)
6 年次 1 学期（交流後）	31.5	52.0	13.7	2.7

「話してみたくない」という意欲的でない児童の割合が 10%から 2.7%に大幅に減少したが、「とても話してみたい」という意欲の高い児童の割合は交流前と交流後では大きな変化が見られなかった。一方，「話してみたい」という児童の割合は交流を通して大きく増加した。このことから，集団として全体的な意欲を高めるためには「話してみたくない」という児童をいかに「話してみたい」へと向かわせる指導が重要であること言える。

2-2-5 課題と展望

海外の小学校との交流プロジェクト学習を通して，児童の外国に対する興味・関心は高まり，外国語学習における意欲も高まったと言える。しかし，このような取り組みを日々の授業にどう取り込んでいくか，時差のあるパートナースクールといつ打ち合わせをし，どのように交流を進めていくか，などを考えると，多忙な現場で実現するには多くの課題がある。また，児童の顔が

動画を通して海外の小学生に映し出されることについて保護者の了解を得るという肖像権の問題，ビデオツールに関しても当該市と台湾側で規制や条件の相違があり ICT 機器に関する問題もある。教育委員会，管理職，保護者，クラス担任の理解と協力を得ながら進めていく必要がある。

しかしながら，ICT 機器を使うことで，子どもの学習の可能性は広がる。発展活動として，今後，「アバターが行くバーチャル日本旅行」という活動を計画し，動画作成ツールを使った取り組みも考えている。自身のアバターを使うので，自分の顔を露出することなく，発表に気後れする児童でも安心して取り組むことができる。そして何よりも，海外の小学校に紹介しても肖像権の問題をクリアできる。Norris, Donaghy, & Tysoe (2019) は，英語教育に ICT を活用して情報を発信する能力は Digital Literacy という「21 世紀型スキル」の一つとして積極的に推進している。今後も，ICT 機器を有効活用することで，子どもたちの自信や自己肯定感の高揚につながる取り組みを進めていきたい。

3. 全体的考察

2 つの実践において，児童の振り返りの文言から，自己決定理論の 3 欲求：「自律性への欲求」，「有能性への欲求」，「関係性への欲求」（Deci ＆ Ryan, 1985) に関する言葉を取り出し，まとめた。「自律性への欲求」については，指導者は児童が主体的に活動に取り組む工夫を多く取り入れていたが，児童の振り返りには，これに関する文言は皆無に等しかった。これは，振り返りを取る時期と，振り返り時の指導者の発問に影響されたことが考えられる。「最初はうまく行けるか，不安だったけどやってみたらうまくできて，良かった！」「失敗しても出来るまでチャレンジしたいと思いました。」といった児童の言葉から，「有能性への欲求」については，達成可能な課題より少し難しい課題を設定することや，中間指導における指導者の言葉かけが重要であることがわかった。「関係性への欲求」については，「グループで協力して発表のためにいろいろすることがとても楽しかった。」「言葉や国が違うけど，つながることができた。」といった児童のコメントから，ペアやグループで協同できる課題を設定し，協働での学びの大切さを意識させたことや，実際の相手校との繋がりを大切にしたことで，協働する楽しさや，他校・他国の友達と英語を介して繋がる楽しさ表す言葉が多く見られた。

また，この 3 欲求に該当しない記述については，別途，KJ 法を用いて分析した結果，「異文化・自文化への気づきや理解」「自身の英語力や英語学習への気づき（自己調整能力）」「今後の展望」に分類された。「この交流はすごく大切なものだと思いました。英語があれば世界の人たちと話ができると思うとワクワクしてきます。これから英語を話せるようになって，外国の人と話してみたいです。」と言った児童のコメントから，教員が交流する際に本物の目的・場面・状況を設定することで，児童の興味・関心が高まり，真剣に課題に取り組めた様子が振り返りから見て取れた。

4. まとめ

2 つの実践を通して，児童の自己肯定感・自己効力感を高める外国語の授業を創るために，1. 児童自らが選択できるような課題・内容を設定する，2. 本物の目的・場面・状況を設定する，3. 少し頑張ればできるようなタスクを設定する，4. 友達や国内外の第三者との協働学習を設定する，5. 教師が 1 人 1 人を認め，そして学習者が相互に認め合う，といった 5 つのポイントが非常に重要であると考えられる。

主要参考文献・資料

EMPATICO　Empatico | Connect Your Classroom to the World　https://empatico.org/

Deci,E.L & Ryan,R.M. (1985). *Intrinsic Motivation and Self-determination Theory.* New York, NY: Plenum Press.

学術教育総合研究所（2018）「小学生白書 Web 版 2018 年度調査　小学生の日常生活・学習・自由研究等に関する調査」Extracted from: https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/201809/chapter7/03.html

西田理恵子（2022）.『動機づけ研究に基づく英語指導　大修館書店.

Norris,L, Donaghy,K. & Tysoe,Z. (2019). *Promoting 21st century skills.* British Council.　Extracted from: https://selfdeterminationtheory.org/SDT/documents/2000_RyanDeci_SDT.pdf

東野裕子・髙島英幸（2007）.『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店.